

小学校書写の手本作成活動

— 書写から他教科へ —

林 朝 子*

小学校書写に対する学生の意識は低く、書写指導に携わりたいと考える学生も非常に少ないのが現状である。その背景には、書写の学習内容の理解と、児童と「文字を書くこと」の関係性の理解が不十分であることが窺える。そこで、本実践では、小学校教員を目指す学生を対象に、小学校書写の硬筆手本作成を授業課題として取り入れ、手本作成の過程で、書写指導は児童に「文字を書くこと」に注目させやすいことと、書写で扱う内容は児童の全ての学習活動につながることの2点への意識化を目指した。

キーワード：小学校書写、硬筆手本、「文字を書くこと」、意識化、他教科

1. はじめに

近年のパソコン、携帯電話等の電子機器類の普及により、「手で文字を書く」機会は減少傾向にある。しかし、文字を習い始める小学生児童にとって「手で文字を書くこと」は、文字を知ることと同時に、全ての学習につながる活動である。児童が「文字を書く」ことに焦点をあてられるのが書写指導¹⁾といえる。「手で文字を書く」ための要件である「姿勢・用具の持ち方・指の使い方・点画の書き方及びその組み立て方・筆順・筆圧・握圧・速さ・運筆のリズム等」(久米 1989) が、書写では重点を置いて指導することが可能となる²⁾。

しかし、教員を目指す学生が持つ小学校書写に対する印象は非常に薄く、書写の時間が設けられていること自体に疑問を抱く者さえいるのが現状である。書写といえば、手本通りに書く毛筆活動というイメージを持つ学生も少なくない。その背景には、学生が受けてきた書写指導の実態が大きく反映されていると考えられる。また、学生自身が、書写の学習内容の理解と、児童と「文字を書くこと」の関係性の理解が不十分であることも示唆される。

松本(2009)は、書写指導は「他の学習活動や日常生活との関係が明確になるような具体的な実践」が行われるべきであると述べているが、現状の書写指導は非常に閉ざされた、独立した科目のような扱いがなされている。

そこで、本実践では、小学校教員志望学生に、書写指導は児童に「文字を書くこと」に注目させやすいことと、さらに、書写で扱う内容は、児童の全ての学習活動につながることの2点の意識化を目指し、様々な教科の教科書を題材にし、硬筆手本作成を試みた。

2. 授業概要と学生の背景

本実践は、平成24年度前期「小学校専門国語」前半(授業時間数は15コマ中8コマ)において行った。この授業は、小学校教員を目指す学生が履修しており、履修学生は43名であった。学生の所属は本学教育学部の全てのコースに亘る。

授業内容は、90分の授業時間の内、前半45分を講義、後半45分を毛筆活動に充てた。講義では『明解書写教育(改訂版)』に沿い、書写指導全般を取り扱った。宿題として、硬筆による書写課題も出した。硬筆手本の作成は、最終課題として取り上げた。

本実践を行う上で、学生が書写に対しどのような考えを持っているのかという背景を知るために、初回授業の際、以下の3点について、アンケート(自由記述)を行った。

- 1) 小学校書写に対する思い出
- 2) 子どもに書いてほしい文字
- 3) 硬筆手本作成の可能性

これら3点についての回答を挙げる。

1) 小学校書写に対する思い出

この質問項目は、学生自身が書写を振り返るためのものでもあり、今後の授業を受ける姿勢態度、将来的には書写指導の方法や内容を深めることにもつながると考えた。

学生の回答をまとめると、書写に対して「好ましい」と感じているのは12名、「好ましくない」のは31名であった。「好ましい」の具体的な記述は、「子どものころ毛筆を習っていたから好きだった」「賞をもらってうれしかった」等が挙げられた。習字教室に通うなど、文字を書くことに慣れてきた学生は、書写に対して「好ましい」印象を持っているようである。一方、「好ましくな

* 三重大学教育学部国語教育講座

い」と回答したものは、「毛筆が難しく、嫌いだった」「筆でお手本を見て書くのが嫌だった」「準備と後片付けが面倒」「汚れる」といった毛筆に関する内容が多く挙げられた。この回答結果から、「書写＝毛筆」といったイメージが強く持たれていることが窺える。

小学校で実際に硬筆指導を受けたかどうかについては、記憶に残っていない学生がほとんどであった。

2) 子どもに書いてほしい文字

学生が子どもに書いてほしい文字を、どの程度イメージできているのかを知るための質問項目である。また、8回の授業を受け、最終課題として作成する硬筆手本において、子どもに書いてほしい文字のイメージをどこまで具体的に深められているかを明らかにするためでもある。

回答としては、「相手に読める/誰が見ても読める字」が非常に多く、29名に挙げられていた。これは、書写指導の基盤をなす「読みやすい文字を書く」という考え方につながるものである。また、「一点一画をしっかりと書く」「とめ・はね・はらい等をしっかりとできる」といった、基本点画を押さえて文字を書くことに触れた回答は5名であった。

3) 硬筆手本作成の可能性

硬筆手本を作成することができるかどうかについて、「はい・いいえ」の二者択一で答え、その理由も記述させた。手本作成ができないと回答した理由を知ることによって、学生が書写指導に対し苦手意識を持つ部分が明確になると考えた。

硬筆手本を「作成できる」と回答したのは11名、「作成できない」は32名であった。「作成できる」と回答した理由は、「点画をしっかりと押さえた手本を作りたい」「きれいな字をかけるような手本にしたい」「書いて楽しい/書きたくなる手本を書きたい」といったものである。これらは、「子どもたちに書いてほしい字」「子どもたちが書いている様子」をイメージした上での回答であろう。

一方、「作成できない」とした理由は、「字を書くのが下手/苦手」「自分の字には癖がある」「自分の字に自信がない」といったように、「自身の字がどうであるか」に意識が向けられているものであった。これらの記述から、この質問項目への回答をする際に、自身の字を振り返りながら、子どもに書いてほしい字についても同時に考えていると推測できる。

3. 硬筆手本作成の実践

3-1. 硬筆手本作成課題

8回目の授業の際、最終課題として硬筆手本作成を提

示した。手本で使用する文章は、各学生が所属するコースの小学校教科の教科書から選ぶよう指示した。所属コースに小学校教科がない場合、もしくは、小学校教科としては存在するが教科書がない（学年によってはある場合もある）場合は、関心のある教科を選んでよいこととした。手本は、横書きか縦書きで、7～10行程度、鉛筆書きとした。提出の際は、硬筆手本だけではなく、文章を抜き出した箇所の教科書のコピーも提出させた。また、手本を作成した際の書写の観点に基づく意図と、その文章の内容を書かせる意図について、自由記述での回答を求めた。

3-2. 横書き縦書きと教科

横書き手本が27名、縦書き手本が16名となった。横書きが多くなったのは、現在、日常的に縦書きをする機会は非常に少なく、学生にとっても縦書きは書きにくいという苦手意識が働いた結果であろう³⁾。しかし、「児童・生徒にとって国語以外の教科でほとんどが横書きであり、また、一般社会生活の中でも横書きが主流を占めている。書写学習においても、今後ますます横書きの必要性が増してくる⁴⁾」と指摘されているように、書写での横書きの導入も増加する傾向にあり、横書き手本の作成への取り組みは、書字の現状に鑑み、適当と言えるだろう。

次に、横書き縦書きと教科の関係を見ていく（表1）。

表1：縦書き横書き／教科／人数

縦 横	教 科	人 数
横 書 き	理科	7
	家庭	6
	算数	4
	社会	4
	生活	2
	図工	2
	保健	1
	国語	1
縦 書 き	国語	12
	社会	2
	家庭	1
	道徳	1

縦書きでは、当然であるが、教科書そのものが縦書きである国語を選んだ学生が多くを占めた。しかし、横書きの教科書である社会・家庭・道徳からの文章を縦書きにしたものもあった。横書きの文章を縦書きに記した意図は調査できておらず、今後の調査課題としたい。

3-3. 手本の書写観点からの分析

ここでは、作成手本に対する書写の観点における意図の記述内容について、分析を行い、学生が子どもに書いてほしいと思う文字をどのような観点から深められてい

るかを見ていく。

3-3-1. 書写の学習内容に関わる記述

まず、書写の学習内容について、『新編書写指導』（2003）をもとに整理をする。書写の学習内容は、「読みやすい文字を書きやすく実現するため」にあり、その内容は以下のように分類されている（表2）。ここでは、この分類に基づき、学生の記述内容を分析する。以下の①～⑨に分類されない記述は、⑩その他として、別項目を立てる。なお、数字は記述数を表す。

表2：書写の学習内容

①姿勢・筆記具の持ち方
②用具・用材とその扱い方
③点画と筆記具の動き
④筆順
⑤字形
⑥書く速さ
⑦配列・配置、文字の大きさ
⑧書写の形式（書式）
⑨良否・適否の弁別（鑑賞）

①姿勢・筆記具の持ち方

この点に触れた記述は、1のみであった。手本作成する際に、学生自身が姿勢を正して書く、鉛筆の持ち方に気を付けて書く等への気づきは深まらなかったようである。

②用具・用材とその扱い方

この点についての記述は見られなかった。

③点画と筆記具の動き

9の記述があり、7は漢字を対象としており、「とめ・はね・はらい等の含まれた漢字を書かせたい」と具体的な漢字の点画に注目している記述が見られた。平仮名を対象としているのは2で、「曲線的流動的な線を書けるように」という記述があった。

④筆順

漢字の筆順については2の記述があり、「布」「必、機」を筆順を間違えやすい漢字として挙げている。

⑤字形

14の記述が見られ、2は漢字、11が平仮名、1が片仮名を取り上げていた。漢字については、「様々な字形の漢字」という漠然とした表現に留まっているものと、「左右・内外・上下のパターン」と具体的な漢字の字形パターンを挙げているものがあった。平仮名についての記述は、「り・し・く・こ等、縦長のバランス」「め・お・あ等、バランスの取りにくい平仮名」「回る文字⁵⁾の形

「46字中27字の形を練習できる」等、それぞれのひらがなの字形の特徴をとらえようとする意識が窺える。

⑥書く速さ

この点についての記述は見られなかった。

⑦配列・配置、文字の大きさ

この観点についての記述が最も多く、53見られた。さらに細かく内容を見ていくと、【漢字と平仮名の文字の大きさバランス】に対する記述が37挙げられた。「漢字と平仮名では、画数の多い漢字のほうを少し大きく書く」という記述が大部分を占めたが、漢字の中でも「画数の多い漢字の方が、画数の少ない漢字よりも少し大きくなる」など、画数との関係まで踏まえた上での大きさに対する記述が見られた。

【行の中心】の記述は8で、縦書きについてが7、横書きが1であった。横書きの場合、罫線と罫線の中心に文字の上下の中心を持ってくる方法もあるが、ここでの記述は、下の罫線に文字の下の部分を配置する書き方が取り上げられている。

【字間の取り方】については、6の記述があった。「等間隔になるように」という記述以外に、「平仮名が多いので、まとめて書くようにする」といった、文字群としての字間の取り方に意識が向けられている記述も見られた。

【行頭・行末の位置】の記述は2であった。行頭・行末の位置を揃えることは、文章となった場合の読みやすさという点から非常に重要な観点であるが、学生の気づきは少なく、また、実際の作成手本においても、行頭・行末の位置に意識が向けられていない手本が多く見られた。

⑧書写の形式（書式）

2の記述が見られた。内容は、「段落の初めは1字空ける」というものであった。

⑨良否・適否の弁別（鑑賞）

この点についての記述は見られなかった。

⑩その他

「様々な文字を書く」といった記述が多く、17見られた。漢字・平仮名・カタカナ・ローマ字・数字・句読点・記号等、日本語の文章に現れる様々な文字に意識をさせることを目的にしている記述が多く見られた。これらの記述には、①～⑨の多くの観点が含まれていると考えられるが、観点を分類する基準となる具体的な記述が無かったため、⑩その他として扱った。しかし、この記述は、様々な文字を見、実際に書くことを通して、書写

への感覚を養うことへもつながり、重要な気づきであると言える。

以上、書写の学習内容に基づき、学生の記述を分析した。学生の記述数の多い観点については、学生自身も明確に気づいており、手本を書く際には注意を向けながら、書字していたと考えられる。しかし、記述数の少ない観点については、学生自身の気づき自体が少ないとも考えられ、また、これらの観点を踏まえた上での書字が実際に行える能力が身に付いていない可能性もありうる。学生の書字に対する気づきを更に深めていく必要がある。

3-3-2. 文章内容に対する記述

学生の所属コースの教科、もしくは、関心のある教科の教科書の文章を選び、手本作成を行った。記述には、次のようなものが見られた。一部を紹介する。()内は教科を示す。

- ・状態変化の単元は4年生で扱うが、4年生の単元としてはやや難しい。また、中学校以降の単元としてもとても大切な分野である。したがって、今回教材として扱った。(理科)
- ・ガリレオの話を取り上げることで、子どもたちに書写を学びながら他の教科も考えられ、興味を持ってもらう。(理科)
- ・算数の導入部分である。苦手な子も「がんばろう！」とやる気を出させるような文章なので選んだ。(算数)
- ・この部分は問題となっているので、書いた後で解いて、算数の勉強にもつなげたいと思う。(算数)
- ・家庭科の教科書の中の文章を抜粋したものであるが、内容は家庭科の中だけでなく生きていくうえで知っておく必要がある大切なことである。五大栄養素の存在を知ること、活動したり成長したりするためにどの栄養素も偏りなく摂取することを心がけるようになってほしいと考えた。(家庭)
- ・歴史の観点から見ると、この時代は日本が西洋の文化を取り入れ、それまでの文化を塗り換えていく時代です。今私たちが見ている風景がどのような契機でつくられていったのか、児童に関心を持ってもらいたいです。(社会)

今回の手本作成では、児童に「文字を書く」ことを通して、内容理解を深めたいと思う文章を選ぶ過程も重要視した。文章を選ぶ過程は、書写で焦点を当てて指導される「文字を書く」ことが、実際は全ての教科、学習につながるものであることを意識できる機会になると考えたからである。学生の記述は、「なぜそれを書かせたい

のか」という視点で書かれているものが多く、「文字を書く」ことと他教科・学習とのつながりが意識化できたと考えられる。

3-3. 普段の文字と手本の文字

2. で記したように、43名中32名の学生が「手本を作成できない」と回答している。「できない」理由は、「字が下手／苦手」「自信がない」というものであったが、最終的に提出された手本の文字は、全て普段の文字より丁寧に一点一画に意識を向けながら書かれていることが感じ取れる。「文字を書くこと」自体に強く意識が向けられていたと言えるだろう。では、「できない」と回答した学生3名(A、B、C)を取り上げ、普段の文字と手本の文字の違いについて詳しく見ていきたい。

A：普段の文字

この部分、いつもは丁寧な字で書くが、手本のバランスに気をつけさせる。また、文章を丁寧語で書くときに多用する「ました」を何度も練習させる。

A：手本の文字

ごんは、村の小川のつづみまで出てきました。辺りのすすきのほには、

Aの場合、普段の文字は文字の大きさが十分に統一されていないが、手本では漢字を平仮名に比べて大きく書き、文章全体においても文字の大きさに対する配慮がなされている。普段の文字では、点画の接し方まで意識があまり向けられておらず、字形が乱れている文字もあるが、手本では点画の離接関係が十分に把握されている。「す」についても、手本ではしっかりと平仮名の結びが表現されている。

B：普段の文字

ようにさせることも目的としている。
また、横書きは縦書きと違い、中央線をきり行内の中央線も意識しながら文字を書いた

B：手本の文字

食品にふくまれる栄養素は、わたしたちが生命を保ち、活動し、成長するためにはなくてはならない

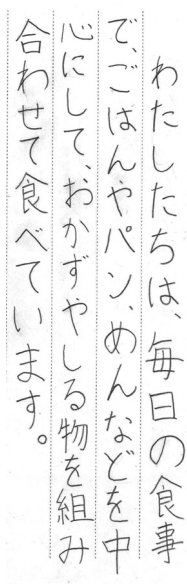
Bの場合、普段の文字は「左上から右下」に若干傾く傾向が見られるが、手本の文字ではその傾きが全く現れ

ていない。漢字一文字の画と画の間も、普段の文字では等間隔ではないが（例：「目」）、手本では横画・縦画とも2本以上並ぶ漢字では等間隔に位置づけようとする姿勢が見られる。平仮名では「る」の書字の違いが著しい。

C：普段の文字

画数やバランスの観点から、様々な漢字があるので、それらをしっかりと書けるようにすること。
カタカケも、しっかりとバランス良く書くこと。

C：手本の文字



Cの場合も、Aと同様に普段の文字は文字の大きさの統一が十分ではないが、手本の文字ではかなり改善が見られている。普段の文字では、「はね」（例：「字」）など細かい点画の表現までは意識が向けられていないが、手本では漢字の点画がしっかりと表されている。行の中心に文字を位置づけようとする姿勢も感じられる。

3名の学生を取り上げ、普段の文字と手本の文字の比較を行った。実際の文字の変化を比較することで、書字の際に学生が意識を向けた点を詳細に読み取ることがができる。手本は「作成できない」と回答した学生であっても、2.で記した「子どもに書いてほしい字」として「相手に伝わる文字」を手本の中で十分に表現できていた。

学生の記述内容には多くは表現されていないが、実際の書字の際には、「読みやすい文字を書きやすく実現するため」の書写の学習内容への意識が、程度の差こそあれ、かなり向けられていたと言えるだろう。例えば、学習内容③点画と筆記具の動きに分類される記述は9に留まっているが、手本の文字を見ると、全員が普段の文字に比べ点画がより確実に表現されており、点画を鉛筆で書くことに十分意識が向けられていることがわかる。

4. まとめと今後の課題

本実践では、硬筆手本作成を通し、学生に次の2点を意識化できることを目指した。

- 1) 書写指導では、「文字を書くこと」に注目させ、「読みやすい文字を書きやすく実現するため」の学習内容に焦点を当てやすいこと
- 2) 書写で扱う内容は、全ての教科・学習活動につながること

1)については、学生の記述内容だけでなく、普段の文字と手本の文字を比較を通し、学生はある程度の意識化ができていたと言えるだろう。しかし、今回の報告では、文字の比較に関して、細かな観点からの分析はできていない。意識化をより明確に提示するには、文字比較の詳細な分析が必要であり、今後の課題としたい。また、記述として顕在化されなかった学習内容は、より徹底して指導を行っていくことも必要であろう。

2)については、各学生の所属コースの教科、または関心のある教科を手本の題材とすることで、書写から他教科へのつながりがかなり感じ取れたのではないか。文章の内容を理解させることと「文字を書くこと」が一体となった教材の作成であり、書写が担う「文字を書くこと」の指導の他教科への広がりを提示できたと思う。

さらに、鉛筆という筆記具を用いた硬筆手本の作成は、「書写＝毛筆」というイメージが強く、独立した科目のように感じていた書写が、「硬筆による書写の能力」を伸ばす役割を担っていることに改めて気づく契機となったのではないだろうか。

今後も硬筆手本作成の実践を継続し、小学校における書写指導の在り方を意識化する活動としての有効性を検討していきたい。

注

- 1) 書写は、平成20年版小学校学習指導要領において、国語科の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に含まれている。また、〔指導計画の作成と内容の取扱い〕では、次のように記されている。

硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30単位時間程度を配当すること。

- 2) 松本（2009）に指摘されているように、「日常生活に生きる書写力」とは、言い換えれば、「（文字言語による人と人との円滑なコミュニケーションを図るために）読み手に配慮して読みやすい文字を書く力」であり、書写における「文字」は、「読みやすい文字」を指す。久米1989で挙げられている要件も、「読みやすい文字を書く」ためのものである。

- 3) 樋口 (2010) では、大学生 70 名を対象に縦書きと横書きに対する意識調査を行っている。「7 割の学生が縦書きよりも横書きの方が好きであり得意である」とされており、また、「日常の書字機会を 100% とすると、縦書き：13%、横書き 87% という結果となり、圧倒的に横書きが多かった」と記されている。
- 4) 『新編書写指導』(2003) pp.123
- 5) 「ま、す、は等」のように、結びのある平仮名を指している。

参考引用文献

- 久米公 (1989) 『書写書道教育要説』 萱原書房
- 全国大学書写書道教育学会編 (2003) 『新編書写指導』 萱原書房
- 全国大学書写書道教育学会編 (2009) 『明解書写教育 (改訂版)』 萱原書房
- 松本仁志 (2009) 『「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開』 三省堂
- 樋口咲子 (2010) 「「文字の配列」の授業研究—縦書きと横書きとを対比しながら書く方法を中心に—」 『書写書道教育研究』 第 25 号、全国大学書写書道教育学会